

創学舎ニユース

No.248

受験生ケータン/ムササビ!!

早いもので八月になってしまった。夏休みも残り四週間。「夏こそ頑張ろう」と思っていた君達の決意は色褪せていないか?不快な気持ちで毎日を送っていないか?

人間とは不思議なもので、その存在の根底をなす心とか精神とか呼ばれているものの在り方は、矛盾に満ちている。つまり、心とか精神とかいうものの中に、異質(時には同質ともなる)なものが共存しているのである。何が心で、何が精神でと定義するのは難しいが、とりあえず「心」という言葉を使って、受験生の事を考えてみる。

暑い日が続く、やるべきことも進まず、誘惑も多い。そこで、誘惑にのり、友人と楽しいときを過ごす。あるいは、情眼をむきほく。或いは、高校野球に釘付けになる。君が、自分の「心」に従って行動したのであれば、その結果、幸福感を味わうだろう。しかし、その時間が終わった後、君は間違いなく不快感を味わうはずだ。実際、今まで何度も何度も経験してきただろう。では、何故こんなことになるのか?

「心の中」には「気分」と「願望」と「理性」など色々な要素があつて、またそれぞれ強弱、濃淡、深浅など様々な変化をする。さて、愚かな受験生は「かつたらしい」という一時的な「気分」に従って行動する。その時自分の「願望」「(志望校に合格したい。成績を伸ばしたい。)を裏切ることになる。「理性」が弱いから、その結果どうなるか想像することができない。しかし、一時の宴が終わると、弱い理性も働き出して、

君が願望を裏切ったことを教える。君は気付いていないが人間にとって大事なものは「一時的な気分」より「願望」の方なのだから、当然自己嫌悪になると言う図式だ。

そこで、きみ達に言いたい。願望を大事にする!誘惑がおきたら、自分の願望を思い出せ!このままいつたらどつたるかを想像しろ!そして、そして、知恵を使つのだ。誘惑の部分を願望に従って行動した自分への「ほつび」として満たしてやるのだ。その日の課題を終えたら自由時間。一週間、目一杯勉強したら、次の日はフリーといった具合に。「気分」と「願望」のバランスをとって生きる。これこそ、今求められていることだ。

ある生徒が言った。「夏休みは十二時間やっています。みんな十時間くらいやってる様なので、それでは差がつかないと思い、十二時間を目安にしています。」その言やよし。そして彼は、「気分」も「やる自分が嬉しい」という方向に変わっていて、願望と気分が一致した状態になっている。いい表情をしている。「気分」は変わるものだぞ!また、別の生徒が言った。彼女は講習ごとに来ている生徒だ。「十時間の勉強ってやれるものなんですね。」気分わず、淡々としたその物言いは、さすがらしい。彼や彼女が、将来どういつ人生を歩むかは分からない。しかし、自分の願望を大切に、一生懸命と取り組むことは素晴らしいことで、今後の人生に大きなプラスとなることは間違いない。夏休みもあとひと月弱。君も、まだ出合っていない自分に会い!

佐賀のがばいばあちゃん

その2

自分の中で封印していたはずのひどい思い出しかし映画を観ていると、不思議にも、それが懐かしさとともに脳裏によみがえってきたのだ

った。

私が年を重ねたせいもあるのかもしれない。だが、それよりも「おまえがこだわっているものなんて、端から見れば結構つまらないものさ。」いつまでとらわれているつもり?」と映画に問いかけてられているような気がしたのだ。

いずれにせよ、見終わったあとに心が軽くなったことは紛れもない事実である。貧乏自慢のような話になってしまったが、思えば、それほど不幸ではなかったよなあ、などと考えた。祖父には随分愛情をもらった。非常に短気な人だったらしいが、私に手を上げたのは、私がものすごいわがままを言ったとき一度だけである(その祖父も大学の時に亡くなった。全く孝行できなかったのが悔いである)。教師にも応援してもらった。大学にも行くことができたし、社会人として仕事に従事することもできていた(強いてあげれば、質素な食生活だった反動で、今ではこんな体格になったことくらい???)。

要は、自分を呪縛してやまないものは、結局自分自身だということ。決して、周りの人々とか環境のせいばかりにはいけない。それが、今回私が映画から受け取ったメッセージである。(関)

トーチライト4

風が気持ちよかったから、というのには自殺を思いとどまる理由としては、不十分だろうか。母を筆頭とした家族のことも、数は少なかったけれど信頼していた友人のことも、脳裏には浮かばなかった。高三の時に自殺を考えた私を踏みとどまらせたのは、電車から降りた瞬間に右肩に吹き付けてきた風だった。死んではだめだ、そう思った。

田植えの時期からほんの少し経っていたと思う。植えられてまもない稲は空気を青色に染めていた。気温は高く、一車両しかない電車の中は特に蒸し暑かった。理由は思い出せないけれど、その日は普段下校時に使う電車より一本遅い電車で一人に乗った。

進行方向に向かって左側に、私のことをいつも笑っていた女の子が3・4人座っていて、その日も笑っていた。なんとか電車の一番前までは行けたのだが、そこでそれまで2年以上耐えに耐えてきたものが、体の底から噴き出してきた。

生きるのはなんてつらいだろう。私をいつも笑っていた少なくとも私にはそう感じられた女の子のグループは同じ中学校の1学年下の子達で、毎朝駅で顔を合わせなければいけなかった。子供の残酷さは、残酷なことをしている本人がその残酷さを意識しないことにより、一層強められるのであるが、彼女たちには人間の心を、人間の尊厳を踏みこじっているという意識など、なかっただろう。修学旅行に2年生が抜けかけて、朝に駅で会う必要がなかったことがある。いつもよりは不安も怯えも、大分少なくなったあの日の開放感は今でも覚えている。もう戻ってこなければ良いのに、とも考えた。

高校の時の経験を通じて、それまで外に向かっていた思考が、自己の内面に向かうようになった。自殺を考えたことが、心の裏側を自覚するきっかけとなったように思う。人間がとてつもなく醜いように思えたけれど、私の中にも醜さが芽生えていた。大学生の時に話題に上がっただけで意識を失いそうになったこともあるほど、一番の弱点であり続けているので、この体験をして良かったとはまだ言い切れない。これ

からも、白か黒かを決められない中間の状態を、揺れ動いていくのだろう。しかしサン＝テグジュペリの「自分の弱小を知ることの意味が今にして理解される。それは決して自己の否定ではない。行動の本源なのだ。」という言葉が、深いところで私を支えてくれている。

今でも自殺へと逃避したくなる時があるが、それは過去の苦痛と未来への不安に溶けてしまっている時の、私なりの甘えなのだ。それでも、今は多分、実行はしないと思う。空を見上げる度に、いまだ見果てぬ世界がひらけていることを感じられるから。全てを終わらせるには、まだ早すぎるだろう。

私自身も含めて人間は醜く、現実は厳しかったけれど、右肩にその感触をとどめる風の気持ち良さ、匂いたつような青色に染められた田園風景の美しさは、忘れられない。(武内)

私の好きな言葉

私が三歳の時、父の勤めていた酒造会社が倒産しました。この時父は思い切ってお酒の知識を生かし、酒屋を始めました。高度経済成長の時流に乗り、商売は軌道に乗りかなり繁盛するようになりました。

自宅とお店は別で、母親の帰宅は毎日夜の九時過ぎ。食事はいつも夜の十時頃。父は夜ほとんど帰宅せず仲間とマージャンの日々……。

朝たまたま寝ている姿を見かけるだけ。少しも顔を会わず、学校に行くことがほとんどでした。母は店の仕事と家事と子育て、家と店との往復で自分の時間もなく毎日追われる日々でした。それでも年三回は春・夏・冬休みに、家族で映画を観に行き、食事をしたのは楽しい思い出です。しかし、今思い返すと普段家族がそろって食事をするという機会は本当に少なかった

と思います。

今でも良く覚えているのですが、中学の時、理科の教師が、「昨日の夜天ぷらだった。」と授業中に話す機会がありました。私は子ども心に、「何て貧しいものしか食べていないんだ」と思ったのです。なぜなら私は大人になるまで、揚げたての天ぷらというものを食べたことがありませんでした。当時、スーパーのお惣菜としての天ぷらしか食べたことがなかったからです。昔は電子レンジやオーブン・トースターのようなものがなかったので、温めなおした天ぷらを食べたことがなく冷えきった固い天ぷらしか食べたことがなかったからです。

その後、中二高一位まで今でも思い出出すことがつらい家庭内の出来事がありました。今は両親は大変仲良く暮らしています。そしていつしか私が大人になって家族で食事をするたびに「皆で食べるの美味しいね」という言葉を必ず言うようになっていました。最初は私は気にも留めていませんでした。心の中では「そんなこと言ったら別に味が変わるわけでもないし……」などと思っていました。

しかしこの何年か、父のこの言葉は私の心に染み入るようになってきたのです。

今でもたまたま私が実家に帰って両親と食事をする機会があると、家にいる時は別にたいした「おすそでなくても、皆で食べるの美味しいね」と必ず言うのです。今になって私は父の言葉の意味が分かりました。両親と一緒に食事をする確かにいいのです。楽しいのです。両親と何気ない会話をしながら食事をする本当にいいのです。

最近思うのは、両親の中に入った一人私が入っただけでも父は嬉しそうに、この言葉を繰り返すのです。私はこの言葉を聞く毎に自分は両

親から受け入れられている、大事に思われている。愛されている……両親からの愛情をひしひしと感じるのです。

家族と一緒に食事をする……普段の何気ない普通の行為ですが、私にとってはとても大事な大事な時間だと思えるのです。(白石)

受験は9月だ(中三生へ)

長い夏休みも、早や一週間を過ぎた。とりあえず入れる所に入ろうと思っている人はともかく、なんとしても(できれば) 高校へという人にとってはいよいよ正念場である。夏期講習に入ったが、気を引き締めて一層頑張りたい。

さて、見出しに、受験は9月だと書いたが、それは次のような事情による。九月、十一月までの模試・実力テストの平均の偏差値によって進路指導がなされること。従って、九月から勉強を始めたのでは遅いということ。こういう事情を考えれば、受験は九月から始まるべし。この気持ちで頑張らねばならないということが実感できるだろう。

勿論、受験するのは、親でもなく教師でもなく、自分自身である。中には偏差値が多少悪くても自分が行きたい高校になんとも入らうと頑張る生徒もいる。最終的に合格するかどうかは、また別の問題であるが、そうやって自分の意志を通すということは、それなりに立派なことである。しかし、それはあくまでも少数であって、大半の生徒は学校の指導に頼った決定をしてしまうようである。とすれば、とにかく九月からのテストで高得点を取ることが、絶対の条件となる。そのことを肝に銘じるべし。さて、中三ともなると、八十%以上の生徒が塾に通う。夏の間は、塾で四、五時間の授業と

家で二、三時間の学習というのが普通である。といって大半の生徒がこれぐらいのことはしているのだから、自分も同じぐらいの勉強をすればいいのだからと言つのは甘い考えである。やった分だけ自分も伸びるが、他の人も伸びるから自分の順位は変わらないということを確認すべきである。自分の成績を上げたかったら、外の人の倍の集中力をもって、倍の努力をすること。これしかないのである。さあ、そうと分かたら、気合を入れて頑張りなさい。(小林)

今号では教育宣言紹介及び親子の関係はお休みです。

創学舎から本が出ました

受験生は読め! (合格のトゲツがここに)

勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。非売品です。希望者には無料で差し上げます。

愛の壁 お父さんお母さんあなたの愛は子供に届いていますか (著者 小林 恵白)

創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他 全国書店で発売中。



卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。